



130号

2008/4/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



草原でくつろぐ 曲登郷のチュクンゴンポ活佛 2004年8月 四川省甘孜チベット自治州理塘県曲登にて 鈴木晋作

「わんりい」132号の主な目次

| | |
|-------------------------|----|
| 北京雑感その(23)「北京人のお行儀Ⅲ」 | 2 |
| 私の調べた四字熟語(21)「起死回生」 | 3 |
| ものしりノート(6) 箸の文化比較 | 4 |
| 松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より | 5 |
| すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮 | 6 |
| 媛媛讲故事(2)「女媧造人」 | 8 |
| スリランカ紹介(17)「バス旅行—最終話」 | 9 |
| 四姑娘山写真だより(9)「四姑娘山のヤクと馬」 | 10 |
| 中国を読む(50)「漢字と日本人」 | 11 |
| 私の四川省一人旅(15) 亜丁Ⅱ | 12 |
| 大連だより・日本語教師雑記(5) | 14 |
| アフリカとの出会い(24)「アフリカの政治家」 | 15 |
| 【活動報告】山西省家庭料理で交流しよう! | 16 |
| ミンミンさんと一緒に | 18 |
| 「わんりい」掲示 | 18 |

♪♪「中国語で歌おう!会」・4月の歌 ♪♪

「回娘家」(中国河北省民謡)

*中国語歌詞を16Pに掲載しました。

▶ 於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室 ◀
JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

4月11日(金) 19:00 ~ 20:30

指導: 趙鳳英 zhào fèng yīng 録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」於:まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更もあります)

19:00 ~ 20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局へお問合せ下さい。

 トイレ

お行儀を云々すると、個人ベースはともかく、「北京人の」などと言うと、「お行儀は、その国の生活習慣が影響するものだから、部外者がとやかく言う筋合いのものではない」との批判を受けそうです。

確かに、生活習慣の違いから、私たちが見ると「おや？」と思うことも多々あります。例えば、中国の方は食器を洗った時、濡れたまま戸棚にしまいます。何だか戸棚の中で汚れを呼びそうで気になりますが、乾燥が著しい北京では余り不都合は無いのでしょうか。時々レストランなどで、新しい食器が来ても、底に水分が残っていることがあります。レストランは忙しいから拭かないのかと思っていましたが、家庭でも食器を拭く習慣は無いようです。レストランで濡れたものが出てきたらペーパーナプキンで拭き、乾いていても汚く感じたものは、お茶などを少し注いで洗い、その水を床にこぼします。

日本人が見ると、お行儀が悪いと感じますが、中国の人達は永い間の習慣で、そうするのが普通です。しかしながら、最近新しく出来たレストランでは、床に綺麗なタイルが貼ってあったり絨毯が敷いてあったりして、水分を床にこぼすのは憚られます。今に中国でも、床に食べ滓や水分を落とすことはお行儀の悪い事になって行くことでしょう。

そんな訳で、生活習慣に根ざすやり方に、外国人が「お行儀が悪い」と一概には言えませんが、其処のところを考慮しても、「ちょっと…」と眉を顰めたくなることがあります。それが、中国の方のトイレ使用法です。

皆様ご存知の通り、中国の地方のトイレは仕切りがなくて、オープンですよ。これこそ昔ながらの習慣で、外国人がとやかく言うことではないでしょう。しかしおかしいのは、都会の洒落たレストランやデパートのトイレで、ドアがあるのに開けたままで用を足している若い女性がいることです。家庭でも、親しい友人同士ではトイレのドアを開けたままで話しながら用を足すこともありますから、これも習慣でしょう。そのせいでしょうか、都会のトイレでもドアが壊れていたり、鍵がかからなかったりすることが多いですね。北京の人々はハンカチを持ち歩く習慣が無いので、トイレにはエアドライヤーの設置が目立ちますが、これも9割方壊れています。水道の蛇口が壊れていて水が出ないこともあります。日本式に考えると、施設を壊れたままで置いておくのが不思議ですが、これも、すぐ壊れる器具に対処するための施設管

理者の習慣と思えば腹も立ちません。

しかし、清潔と言う観点から言えば、中国の人達のトイレに対する感覚を疑います。水道が壊れているのに、床はビショビショだったりします。一度、山西省の平遥へ出かけた時、街中で有料トイレを利用したことがありました。5角払って入ったのですが、中は何年も掃除がされてないような有様で使える状態ではありませんでした。係の人に文句を言いましたが、知らん顔をされてしまいました。料金を取るからには、それなりの管理をしていると思いますが、中国では必ずしもそうとは限りません。そういえば、違う時に、もっと田舎のパーキングエリアで、トイレの前におばさんが座っていて3角取られました。塀の後ろに回ると、屋根も無いようなトイレでした。出て来て文句を言おうと思った時には、おばさんはもういなくなっていました。聞いてみると、元々無料のトイレなのに、時々地元の人が座って料金を取っているのだそうです。

どうも、中国の人々のトイレに関する考え方は、この延長線上にあるようで、折角良い施設を作っても、清潔にして提供しよう、汚さないように使おうと言う意識が薄いようです。勿論、北京中心部の政府機関や外国企業のビル、高級ホテル等は別ですが、市民がよく利用する一流デパートや大きな本屋さんでも皆、設備は良いのですが、使い方が悪くてあまり清潔ではありません。

北京国際空港搭乗口付近のトイレは、3,4年前までは良かったのに、最近はかなり汚れが目立つ気がします。中国人団体旅行が増えたせいだと考えるのは偏見でしょうか？実際のところ、一人旅(と言っても、たかだか北京-成田の往復だけですが)の時、機内持ち込みの荷物が両手にあるとトイレに行くのを躊躇します。私自身、汚れに対して余り敏感な方ではないのですが、中国のトイレはゆっくり入れません。成田に着くと、スーツケースを受け取る前に必ずトイレに入って、日本に着いたことを実感します。

中国で唯一清潔なトイレに感激したのは、九寨溝です。水洗ではない洋式トイレでしたが、ビニールの袋状シートが便座と壺を覆い、次の人が入ると前の分をシールして下に落とし、新しいシートが便座の上に出て来るのでとても清潔でした。しかも係員が頻繁に回って目を配っていました。水洗には出来ない世界遺産九寨溝だからこの方法ですが、都会では、今ある施設で、使用方法を啓蒙するしか、トイレを清潔に保つ方法はないでしょう。

「起死回生」は、私たちには大変馴染みの深い四字熟語だと思います。スポーツの試合、企業間の競争、受験競争などで、劣勢をなんとか挽回しようと、必死に秘策を練り、もう一度挑戦しようかという場面で、大変良く使われています。

ごく最近の例では、今大混戦中の米国の大統領選における民主党の候補者選びに関して、3月3日付朝日新聞夕刊の“素粒子”欄にこんな記事が載っていました。

「決戦テキサス、オハイオを前にヒラリー起死回生の秘策が三つ。涙を見せる時期。涙の粒の大きさ。涙を効果的に見せる表情術。」

では、辞書を見て見ましょう。

三省堂 現代国語は、「死にかかっている人を生き返らせること。いまにもだめになるところを立ち直らせること。」

小学館 中日辞典、「^{qisihuisheng}起死回生 医療技術がすぐれていることをほめていうことが多い。」

と、それぞれに載っています。

さらに、中国光明日報出版社(中国北京市)の「中華成語故事」では、

「起死回生」死にそうな人を生き返らせること。医術が非常に優れていることを言い、希望の無い事を挽回することの比喩。」

と、あります。

この成語の由来は<史記・扁鵲倉公列伝>の

「越人非能生死人也，此自当生者，越人能使之起耳。」(越人は、死人を生かせることができるのではなく、自分で生きる者を立ち上がらせることができるのである。)の部分です。

戦国の時期、秦越人と呼ばれる名医がいました。彼は死に直面した多くの人を蘇生させたので当時の多くの人々は彼を、伝説の中の黄帝時代の名医扁鵲^{注1)}になぞらえました。越人は虢国で医者を開業していましたが、ある日王宮の前を通りかかると、太子が今朝亡くなったと聞きました。病気は、血液と気のバランスが全くくずれてしまう^{注2)}酷い症状だったとのことでした。

彼が太子の様子を詳しく尋ねたところ、まだ蘇生の希望が有ると思い、すぐに王宮に行き診察を申し出ました。

宮中での謁見を司る大臣は越人の申し出を、国王に取り次ぐと、急いで越人を太子のもとへ案内しまし

た。越人は身をかがめてしばらく耳を澄ませてみますと、かすかに息が有るのを感じました。また太子の足の内側にはまだ体温が残っており、弱々しいながら脈も打っています。

そこで越人は「太子様はただ意識を失っているだけです。私がすぐにお助けいたしましょう。」と言うと、弟子に針の準備をさせ、太子の頭、胸、手、足に数本の針を打ちました。しばらくすると太子は息を吹き返し穏やかに呼吸を始めました。彼は別の弟子を呼んで、太子の脇の下に温湿布をさせました。すると間もなく太子の意識が戻ったのです。

虢国の国王と大臣はこの情景を見て大変喜び、何度も感謝の言葉を述べました。

秦越人は「太子様が早く快復されますよう、薬を処方致します。二十日も服用すれば、きっと良くなります。」と言いました。太子が二十日間その薬を服用したところ、すっかり元気を取り戻しました。

越人は「私が生き返らせたのではなく、太子様は死んではいらっしやらなかったのです。私はただ太子様をお治しただけです」と言いました。

<注記>

1) 扁鵲(へんじゃく)：古代中国、とくに漢以前の中国における、半ば伝説的な名医である。その行動、人格、診察、治療のありさまは『韓非子』や『史記』その他にさまざまな逸話を残し、「漢方医で脈診を論ずる者はすべて扁鵲の流れを汲む」とも言われ、また彼の言動業績から「六不治(ろくふち)など多くの漢方医学の用語や概念がうまれた。転じて、今では「扁鵲」もしくは「耆婆扁鵲(ぎばへんじゃく)」という、それだけで名医の代名詞として用いられることも多い。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

2) 血気：東洋医学では、血(血液)と気のバランスがとれていることが、健康であるとされた。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、‘わんりい’の会員と関係者の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。

‘わんりい’の頭には日中の冠を載せていますが、中国に限らず各地(主としてアジア)で体験された楽しい話、見聞した面白い話、美味しくて珍しい食べ物の話などなど、気楽にお寄せいただいているいろいろな角度から諸国の文化に触れてみたいと思います。

紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのであらかじめご了承下さい。

尚、原稿の締め切りは20日ということにしていますが、編集の都合上、早めに頂ければ有難いです。(田井)

もの知りノート(6) “箸”の文化比較

岡村景孝

日本の食文化も中国からの伝来によるものが多く挙げられます。その中で「箸」もやはり中国から伝えられたものですが、日本は食べ物の手前に横に置き、中国や韓国は右側に縦に置きます。

また箸の形状も異なり、非常に興味深いものがあります。調べた範囲で述べてみましょう。

1、箸の起源

5000年前の中国で煮えたぎった鍋から食べ物を取り出すのに、二本の木の枝を使ったのが箸の始まりだといわれています。

また、箸はもともと竹の棒の中央部分を加熱して曲げて作った「トング」(現在でもパン屋さんでパンをはさむ為に置かれているものを想定するとわかりやすい)に由来するという説もあります。

中国から東南アジアを中心として一帯に広められたものと思われ、現在中国以外に日本、韓国、台湾、シンガポール、ベトナム、モンゴル、北朝鮮などの国でも箸が日常的に使われています。タイでは手づかみで食事をしていましたが、今では麺類を食べるとき等には箸を使うことが多いようです。

また中華料理、日本料理の世界的普及により欧米でも箸を使える人口が増えているようです。箸を使う人口の比率は世界の人口の30%を占めると言われています。その他は西欧式のナイフとフォークまた手を直接使って食事をします。

2、箸の形状と置き方の違い

1-2 太陽暦

箸の素材と形状や長さは様々です。

右上に掲載の写真は一つの事例ですが、上から、台湾のプラスチック、中国の磁器、チベットの竹、インドネシアのヤシの木、韓国のステンレス(とスプーンのパア)、日本の夫婦のパアの箸、子供の箸、割り箸の順に並べてあります。

日本のものは箸の先が細くなっているものが多いのは、骨付きの魚の骨と身を選り分けやすくするためでしょうか。

中国のものはやや長く、先も日本のものに比べてそれ



ほど細くなっていません。また中国では大皿からの取り箸は一般的に使用せず、少し前までは自分の箸でお客様に料理を取ってあげるのが礼儀でした。何年か前のSARS騒ぎから最近では中国でも衛生面に注意するようになり、取り箸を置くようになったところもあり、また自分の箸でお客様に料理を取ってあげるという習慣はあまり見かけられなくなりました。

朝鮮半島では戦乱が多かったため箸に耐久性が求められて金属製のものが多いと言われています。しかし、焼き肉料理など金属製の方が実用性があるためではないかと私は考えています。また、韓国ではご飯はスプーンで食べるのが一般的でおかず用に箸を使うようです。

2-2 箸の置き方の違い

中国では箸は食べ物の右側に先を前方にして縦に置かれています。一方日本では手前に先端を左にして横に置かれます。なぜでしょうか？

中国ではテーブルの中央に料理が山盛りに置かれますので各人はそれを箸で自分の小皿にとってきて食べるようになります。必然的に前方へ向ける箸の動きが多くなります。一方日本では個人毎にすでに盛り分けされて目の前に置かれている場合が多いので、手前で横の動きが多くなります。中国の箸がやや長く、日本の箸が比較的短いのもここに起因するようです。

日中戦争のさなか送り込まれたスパイがすべて完璧にこなしたのに、箸の置き方を不注意にも間違えて身元がばれてしまったといううわさ話があります。箸の置き方は長年身に付いた変えようのない習慣のようです。

3、その他の関連事項

3-1 箸の呼称の違い

先に述べましたように箸は中国から伝えられたもので、箸という漢字もまた中国から伝えられた事は間違いありません。しかし、中国ではいま箸という字は日常的

には全く使われていません。箸のことは筷子(クワイズ)と言ひ、箸は古い言葉です。

三国時代だといわれていますが、船乗り達の間で、箸は北方の発音で「ジュウ」と発音し、「住」即ち留まる、船が進まなくなるという発音と同じであり、また南方の発音でも「止」や「滞」と発音が通じて忌み嫌われました。そこで竹冠はそのままにして下に速いを意味する快という字を加え筷子という字を作りました。今では箸という字は日常の会話ではもちろん文章上でもほとんど使われていません。

3-2 その他習慣の違い

●日本では「衣食住」といいますが、中国では移動手段も加えて「衣食住行」といいます。

これらのうち食に関する習慣は日中とも変化が最も少ないといわれています。食は生活に最も密着しており、食材や調理方法、味付けなど変えることが難しいのではないのでしょうか。

中国では「民以食为天」といいます。民衆は食を以て天(最も大事なもの)とするという意味です。中国の朝の挨拶は「吃了嗎?」(ご飯食べた?)が一般的です。

●日本は食材そのものの味を大切にし、中国では食材そのものより調理方法によって味付けを行うのを重要視しています。即ち加熱したものを好み、生ものや冷たいものは体に良くないとして、基本的に好みません。ビー

ルなども冷やさないで生ぬるいものを飲む人が多いようです。

●来客を接待するとき日本では残さないようほどよい料理の量を注文しますが、中国では料理を有り余るほど沢山注文します。無駄ではないかと思うほど余るほど注文しないとお客を満腹にする接待とはみなされないし、またケチだと思われる心配があるからです。

注文メニューがあまりに沢山なので日本人から「中国では、食べきれないほど沢山注文して食材の無駄使いをしているのではないか」というような質問を時々受けますが、最近の中国は持ち帰りは自由です。「包」(パオ)というと、既に用意してある発泡スチロールの容器に店員が手際よく詰めて持ち帰り用の包みにしてくれるようになりました。

●日本の家庭では個人専用の箸が使われていますが、中国では個人用のものはありません。中国人を家庭に招いた折に中国人のお客にのみ割り箸を出すのは、一人だけ除け者にするという意味でマナーに反する行為になります。全員おなじ箸(例えば割り箸など)を使って食事すべきでしょう。

【参考文献】

インターネットフリー百科事典「ウィキペディア」
「閑話中国人」 易中天著 上海文芸出版社
「中日習俗文化比較」 秦明吾主編 中国建材工業出版社

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

四合院芽吹く柳を天蓋に

gǔ pǔ sì hé yuàn
古 朴 四 合 院
tǔ yá yáng liǔ zhī mián mián
吐 芽 杨 柳 枝 绵 绵
huá gài yù zhē yǎn
华 盖 欲 遮 掩

季语:杨柳,春。

赏析:四合院灰砖灰瓦,肃穆端庄,是北京特征之一。院中的杨柳为了寻求阳光,极力向上伸长。那吐芽的纤枝宛如色的曼曼纱,欲遮掩这古朴的建筑。

此句显现出了柳枝的新鲜柔嫩和四合院的苍老坚固,以及象征沉稳的灰黑与象征青春活力的翠绿的对比

長城の果てを呑み込む霞かな

wēi wēi gǔ cháng chéng
巍 巍 古 长 城
jìn tóu cáng yīn qún shān líng
尽 头 藏 隐 群 山 岭
cǎi xiá tūn mò zhōng
彩 霞 吞 没 中

季语:霞,春。

赏析:长城巍巍在崇山峻岭之中,尽头消失在晚霞深处。山峦的起伏肯定会遮住人们的视线,但作者仍想让尽头与血红的彩霞像汇合。这种描写,既表现了天地的广阔,又愚意长城的悠远。无论从色彩来看还是从视角来看,此首俳句都可说是上乘之作。



中国陕北、黄土高原のど真ん中に位置する延川県は、標高1000mほどの山並みが続き、そこに深い谷や溝が縦横に走り、また北から南へと、流域の黄土を巻き込んだ黄色い大河が流れます。黄河です。

1991年1月(旧暦1990年臘月)、私はリュックを背に陕北への旅に踏み出し、途中、山東省と山西省の木版年画と民間剪紙の産地を経て、臘月27日に山西省の臨汾からバスで黄河を渡り、やっと陝西省の白水県にたどり着きました。年末のため、国営長距離バスは運休し、私営長距離バスに乗って洛川に向かいました。バスには正月を家で迎えるために戻ってきた客が数人だけ。皆、帰心矢の如しだったのでしょう。町はずれでさらに乗客を乗せるために停車したとき、小用を足そうとバスを降りた私を見知らぬ荒野に唯一人残したまま、一瞬のうちにバスは発車してしまいました。衣服、カメラ、途中で収集した剪紙と民間年画などの荷物はすべてバスの中です。頭の中が真っ白になりました。

翌日、呆然としたまま手ぶらで洛川へたどり着きました。洛川には誰も知り合いはいませんでした。県文化館の幹部・李楽見を訪ね不運な出来事を話すと、李楽見は黙って私を家に連れて帰り、食事をさせてくれ、泊めてくれ

る一方、私のリュックの行方についてもあちこちと尋ねてくれました。「地獄で仏」とはまさに李楽見のことでした。ありがたいことにリュックは見つかり、中の荷物も全て無事でした。しかし、この災難のせいで私は精力をすっかり失ってしまい、何をやる気分にもなれませんでした。

正月の延安はとても賑やかで、街には人が溢れていました。私は市文聯の友人の協力で市の東にある、橋児溝に残っている古い窯洞を訪ねました。ここはかつて魯迅芸術学院があり、父が若い頃に学んだところです。建国後、この地を再び訪れたいと願いながら果たせなかった父の墓に供えようと一掴みの土を集め、順調とは言えない陝北の旅にやっとけじめをつけることが出来ました。

そのとき、私に付き合ってくれていた友人が「黄河近くの延川県に、高鳳蓮というおばさんがいる。彼女の剪紙はとてもユニークで、斬新なものだ。」と、聞かせてくれました。

以前、私は延川県へ二度訪れたことがありました。ここでは、美術館幹部の馮山運(féng shān yùn)の指導で素晴らしい民間布堆画(アップリケ)の創作作品が作られており、1987年、私が合肥美術館で開催したこの民間布堆画の展覧会と画冊の出版は、美術界に大きな反響を呼びました。

当時私は「陝北剪紙集」という本を編集していましたので、すぐに馮山運の案内で延川に向かいました。延川からは県委に勤めている高鳳蓮さんの長男の白江录(bái jiāng lù)の運転で、奥深いところにある白定源村にようやく辿りつき、あまり外へ出ることが好きではないという質朴な高鳳蓮さんに、初めて会うことが出来ました。

これまで随分たくさん剪紙作品を見てきましたが、高鳳蓮さんの剪紙作品のように伝統的な図柄を打ち破り、奇怪な造形と魅力的な自由奔放な表現力は見たことがありません。すっかりその作品に目を奪われ、直ちに編集中の「陝北剪紙集」の中に加えることにしました。

出来るだけ多種多様な模様を取り揃えて作品を選ぶことにしました。そして、お金を払う段になったことと、私は殆ど無一文だということに気づき、恥ずかしさで一杯になりました。その時、高鳳蓮さんが示してくれた好意は、忘れられない思い出です。彼女は私が途中で災難に会ったことを知り、また、私がこの地にやって来たことの意義を理解してくれ、お金を取らなかつたばかりか、さらにたくさん剪紙をくれたのです。

この旅では不測の事態もおきましたが、大きな収穫のある旅となりました。

家に戻ると早速「陝北剪紙集」の編集にとりかかり、いろいろな角度から検討をした結果、4人のお婆さんの作品に絞り、題名を『陝北四婆姨剪紙』としました。4人のお婆さんはこれまで名前を知られた存在ではありませんでしたが、それぞれの作品は独特の風格があり、この地域を代表する作品と言えるものでした。お婆さんたちは、洛川県の楊梅英、韓菊香、延安十里舖の姫蘭英、延川県の高鳳蓮の4人です。後に、私の父と魯迅芸術学院で同学だった有名な版画家の古元先生*に本の題名を書いていただくよう依頼の手紙を送りました。

1992年6月、編集した作品を安徽美術出版社に提出をして、私は日本へ版画の勉強のために旅立ちました。2年後に帰国をするまでの間、私は出版社との連絡は絶やしませんでしたが、本の出版は出版社側の事情で一向に進んでいませんでした。

4人のお婆さんたちとの約束を実現させたい、そして特に高鳳蓮さんの厚情に報いたいと、私はついに出版社の求めに応じて4000元を支払うことにし、ようやく印刷機を動かすことになりました。そして、やっと高鳳蓮さんたち4人のお婆さんの作品が初めて印刷物となり、全国に紹介されることになりました。やがてこの本は世間の反響を呼び、出版社は再版をし、この本の出版の意義が改めて証明されたのです。

1996年正月(旧暦)、私は、出版をされた本をもって順番に洛川の楊梅英と韓菊香、それに延安の姫蘭英さんたちを訪ねました。本を差し上げ、さらに私の持っている本に記念としてお婆さんたちの名前を書いてもらいました。最後に訪れた延川の高鳳蓮さんのお宅でも、同じように私が

高鳳蓮さんにサインをしてくれるよう頼むと、高鳳蓮さんはどうしても承知をしてくれません。高鳳蓮さんが学校へ行ったことがなくて字を知らないということは知っていました。しかし、誰かが手を添えて書いてもいいのです。楊梅英さんは何年か学校へ行っていました。字をすらすらと書くことが出来ます。韓菊香さんは何日か私塾へ通ったことがあります。昔ながらの繁体字ですが書くことが出来ます。姫蘭英さんは全く字を知りませんので、娘さんが手を添えて名前を書いてくれました。

高家のお嫁さんは楽しそうに、同じようにしようと筆を持ってきて、高鳳蓮さんに教え始めました。すると喜びに浸っていた高鳳蓮さんは不機嫌になり、悩み始めました。その場にいた人たちもいささか気まずい雰囲気になってきた時、高鳳蓮さんは無造作に小さな紙くずを拾い、指先ほどの小さな鼠を剪ったのでした。高鳳蓮さんは鼠年生まれ、この小さな鼠がお婆さんのサインの代わりというわけです。この可愛い小さな鼠は本の扉の上に貼られ、他のものとは別格の存在となりました。それと同時に高鳳蓮さんの独特の性質も伺えるものとなったのです。

* 古元：解放区の創作木版の傑出した代表的版画家



高鳳蓮は「ねずみ」の剪紙を剪って自分のサインにした



典型的な陝北黄土高原の風景 於：陝西省延川県 撮影：周路

盤古が天地を開闢し、草木や鳥、獣、虫、魚などさまざまな生き物が出現しましたが、人間はまだ誕生していませんでした。

その頃、女媧という、人間の体、竜の尾の女神がいました。女媧は天と地の間を漂って旅を続けていましたが、ふと、生気のない世界に強い孤独感を感じました。盤古が造った世界は完璧ではありません。盤古が創造したこの寂しい世界をどうかして生気に満ち溢れさせたいと思い悩むようになりました。

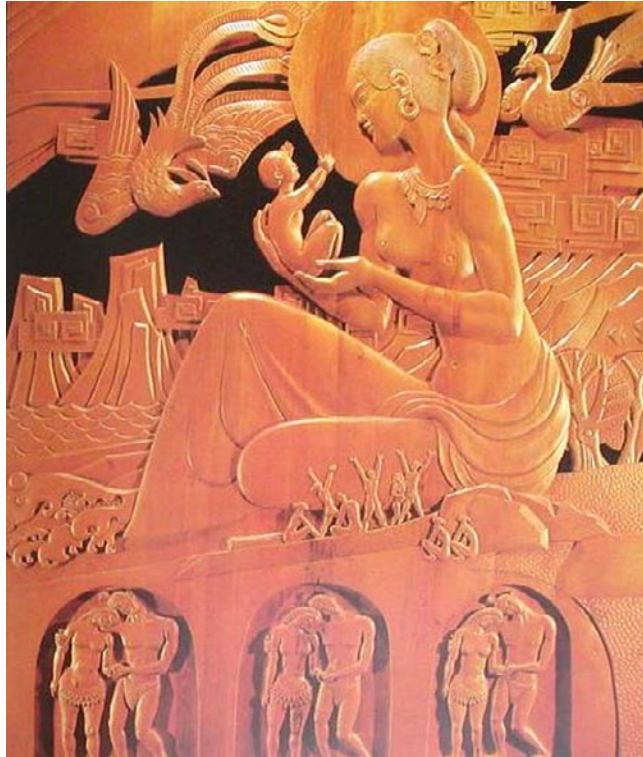
ある日、女媧は黄河の岸辺で川面に自分の美しい姿が映っているのを発見すると、素晴らしいことを思いつきました。彼女は川床の柔らかな黄色い泥で自分の姿に似せて泥人形を造り始め、間もなく自分の姿と殆ど変わらない人形ができあがりました。ただ、竜の尾の代わりに両足をつけました。実は女媧は盤古の細長い便利な足を羨ましく思っていたのでそれを人形に付けたのです。

女媧は沢山の泥人形を作ると、これらの小さな人形に力強く息を吹きかけ活力を注ぎました。すると、人形たちは「命」を持つようになり、真っ直ぐ立って歩くようになり、そして話せるようになりました。女媧はその中の半分に争いを好む性質の強い陽性の息を注ぎ込んで男にし、残りの半分には柔らかな陰性の気を注ぎ込んで女にしました。これらの黄色い肌の男と女たちは生命を与えられると、女媧を囲んで踊り、歓呼し、大地には生気が充ち溢れるようになりました。女媧はとても喜んで人形たちを「人」と名づけました。

しかし、世界は大き過ぎ、一つ一つ造るのでは時間も掛かりますし、労力も大変です。女媧は、一本のわら縄を川底の泥に漬けて込んで縄に泥を含ませ、そ

れを地面に振ると、いたるところに泥が飛び散って落ち、次々に「人」となりました。女媧はあちこち飛び回っては、このようにして「人」を造って行きました。

しかし、ある日、女媧は最初に自分が作り出した人が寿命になって、死んでいたのを見つけました。いったいどうすれば人を生存させ続けられるのでしょうか。いろいろ考えた末、女媧は男の人と女の人を結婚させ、子孫を増やし、育ててゆく責任を『人』自身に任せました。こうやって人類は長く繁栄し続けることができました。



‘わりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

毎年、4月は‘わりい’おたより会費更新の月です。

おたより会費は主として、おたよりの制作費及び送料として充てられますので、継続会費(1500円/年)の納入(上記)はできるだけ3月いっぱいをお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPをご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

クリケットの試合が終わると今度は食事です。昨夜からマンちゃん達が徹夜で用意した料理だけでなく、管理人さんに予めお願いして調理してもらった御飯やカレー等を各自がお皿に盛っていつの間にか始まります。スリランカではカレーなど温かい料理を作り置きする事はしません。これはスパイスの香りを大事にするためです。

又、観光客向けのレストラン等では〇〇カレーという名前でメニューには載っていますが、一般的にはスパイスで食材を炒めたり、煮たりした料理の個々の名称はありますが、〇〇カレーとは呼びません。カレーの事を書き始めると長くなるので、別の機会に書く事にします。

今回は皆で食事を楽しむという事は重視されていないようで、急いで食事を終らせて早く川遊びに出かけたいようです。それでも旦那衆はお酒を飲んで更にご機嫌になったことは言うまでもありません。奥方たちも文句を言うのを諦めたというか、見ない振りをしているようです。

広場からお茶畑の間の急坂をぬって谷間に降りて行くと、小さな滑り台状の滝と淀みのある川に着きました。この一族は何度かこの場所にきた事があってお気に入りの場所の一つだそうで、ここでの川遊びを本当に楽しみにしていた様です。年配の方々は川までの坂を嫌がって広場に残ってお喋りとお昼寝です。川では子供と男達だけでなく女性達も一緒になって滝を滑り降りたり、水の中でボール遊びをしたり、潜ったり、水をかけあったり、水中で足を引っ張ったり、上流に探検に出かけたりと、川まで降りてきた全員が子供に戻って遊びます。特に水着に着替えるわけではなく、クリケットをしていた時の服装そのままで川に入ります。面白い事に女性達は日に焼けるのを嫌がって長袖シャツを着ています。僕からみればスリランカ人の肌の色は羨ましいほどツヤツヤした小麦色なので、それ以上には日に焼けないと思うのですが、やはり日焼けは嫌なようです。

朝の出発が遅れたのとクリケットに熱中したのがたあって川で思う存分に遊ぶ事は出来ず、暫らくすると日が暮れてきました。今まで水遊びをしていたのだから、あらためて水浴はしなくても良いのではないかと思うのですが、スリランカの人達は清潔好きです。皆で石鹸を使って体を綺麗に洗って本日のお遊びは終了です。不思議な事に水遊びの時には服を着替えなかったのに、水浴

の時には男性は腰巻の様なもの、女性も胸まで隠す筒状の浴衣に着替えます。これって結構合理的のかもしれないね。そのままの格好で坂道を登って広場に降りよそ行きに着替えます。僕は水着を用意してきたものの、着替えを用意して来なかったのでクリケットで汗だらけになったアロハを再び着なくてはならず、情けない事に日本人は不潔だと思われた様に思います。着替えが無いのを憐れんだのか、マンちゃんの親戚の人がTシャツを貸してくれました。

再び皆で手分けをして荷物をバスまで運び、お茶畑の管理人夫婦に見送られて帰路につきました。さすがに疲れたのでしょう、バスの前部・中央部席に座った人達は居眠りをしています。後部席の若者達はまだまだ元気で、さすがに歌や踊りはしないけれど、なにやら声高に話しています。運転手さんと助手も、皆がクリケットや川遊びをしている間にバスの洗車を済ませ、たっぷりとお昼寝をしたので元気に運転をしています。往路は4時間もかかったというのに、帰路は寄り道が無かったので2時間弱で出発点のマハラガマに着きました。着くや否やあつという間に解散です。特に名残惜しくはないようですね、なにしろほとんど皆が何かと理由をつけてはしょっちゅう会っているそうですから。実際に、2週間ほど後にバス旅行の写真が出来上がったという理由で、コロンボ周辺に住んでいる人達が集まって宴会が催され、僕も招待されました。宴会では1枚1枚写真を回して、何がそんなに楽しいのかと思うほどの大騒ぎでした。

今回のバス旅行に参加して、スリランカでの血縁関係の結束の固さを再認識しました。それとともに、日本での核家族化を考えさせられました。旅行者が今回の様なバス旅行に参加できる機会はないと思いますが、何処かでこのようなグループを見かけたら声をかけて見たら如何でしょうか。時には特別ゲストとして歓待されるかもしれません。その際には、ゲストである事と最低限のマナーは忘れない事、お金を渡すのではなく何かしらの差し入れを忘れないようにお願いします。差し入れは何でも構いません、何も手持ちがなければ道端でどこでも売っているキンココナツ(果汁が美味だけど1個が10～20円程度)で十分ですし、日本の歌を歌ってあげればもっと喜ばれます。スリランカの人達は物よりも、御礼をしたいという気持ちを大切に思ってくれるからです。

四姑娘山の彼方此方で草を食むヤク（高山牛）写真1が見られますが、10年位前から様相が違って来ています。以前はヤクが荷物や人を乗せて運び畑を耕していました。そして今よりずっと大きく体毛の長いヤクが殆どで、近づくのが怖い位でした。しかし1990年代後半から観光客やその荷物を載せるために馬が導入され始め、扱い易いことから今ではヤクに取って代わりました。

そしてヤクはもっぱら肉にされたり乳を搾るために飼われ、畑を耕す事も稀になりました。そのため平地の牛の血が混じって小型化したり体毛が短くなったヤクが増えています。目の周りが白いパンダ顔のヤクが増えたのも最近の傾向です。

ヤクは皆大きな角を持っていると思われ勝ちですが、中には遺伝的に角の無いヤクが居ます。

写真2は鍋庄坪の稜線の踏み跡道を辿って麓の家から山上の放牧小屋へ届け物をする角の無いヤクです。写真のヤクも皆さんが見た放牧されているヤクも尻尾が垂れ下がっていたと思いますが、ある種の興奮状態になると



写真1 草を食むヤク



写真2 角の無いヤク



写真3 尻尾を立てた壁画のヤク

稀に尻尾を立てます。

残念ながら尻尾を立てたヤクを写真ではお見せできませんが、古代から継承されている神様が乗るヤクの壁画で見る事ができます(写真3)。

四姑娘山の馬(写真4、5)は小型ですが頑丈で、荷物や人を乗せて険しい山道に行くには適しています。平地で飼われている馬と違って四姑娘山の馬は岩がゴロゴロした道や急な斜面を登れます。しかしそれでもヤクには適いません。ヤクならば荷物を運べた高所でも馬では運べず、荷揚げに支障が出ています。また村の若いチベット人は扱い易い馬に慣れ、気性が荒いヤクを扱えなくなっています。何処の世界でも楽になると後戻り出来なくなるようです



写真4 小型で丈夫な四姑娘山の馬

- すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essay-title.html>
- 大川さんのホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>



写真5 草を食む四姑娘山の馬

中国を読む (60)

「漢字と日本人」 高島俊男著

(文春新書)



言語が苦手な人と得意な人がいる。勿論私は前者だが、得意な人は言語習得に苦労していないようにみえる。

中国語、フランス語、英語を自在に操る知人(日本人)曰く、「その言語を覚えるのに一番早くて簡単な方法は、その国の女の子と恋愛すること。あつという間に話せるようになるよ」。

彼自身、妻子を日本に残してフランスに留学中、今のフランス人の奥様と出会っている。彼流の言語習得法を確実に実践しているのだ。これは極端な例にしても、外国語が得意な人は、絶対音感の言語バージョンを持っていて、比較的楽に勉強しているように思える。言語が苦手な私の僻みか？

言語のなかで日本語は難しい部類に入るらしい。日本語は日本独自の文字ができる以前に中国から漢字を輸入。日本の物の見方、考え方を具現化する言葉を漢字つまり外国語を使って文字化した。明治時代には、抽象的な概念を西洋から輸入したうえ、その言葉を次々に(外国語である)漢

字に変換していく。そんな神業を経て、複雑さを増していく日本語。それでも日本人は、その言葉を複雑とも思わず自在に操っていた、というわけだ。

さまざまな歴史背景によって出来上がった日本語は、しかし敗戦後、日本人自らの手で衰弱化される。極度の自信喪失に陥った日本人は、深い議論をまったくせずに国語改革を敢行。結果、独断と偏見で決められた1850字の常用漢字以外の漢字が新聞や教科書から消えた。日頃使う漢字の数が激減するということは、思想を具現化する言葉が減るということ。つまり、日本人の思想も乏しくなっていく。

その後、常用漢字の数は微増するものの、このときに切り捨てられた幾多もの漢字とともに失われたものは大きいと著者は悶絶している。

自らの手で母語を弱体化してしまった迂闊な日本よりも深刻な言語があることを、最近知った。この数日に世界の注目を浴びることになってしまったチベットである。

「ダライ・ラマ法王日本代表部事務所」のホームページによれば、チベット自治区では、中国語の教育が行われ、日常生活の言葉も中国語が優勢となり、チベット語が苦境に立たされている。言葉というのは、その民族の文化そのものだ。単なるコミュニケーションツールのひとつではない。チベット語が失われつつあるなかで、チベット人は何を感じるのか。

(真中智子)

「さあ、出発しよう!!」

アーロンの掛け声に、一瞬沈みかけていた気持ちを取り直し、私は笑顔で頷いた。なんといっても、やっと待ち望んでいた亜丁との再会なのだ。ささいな事につまらない気分でしたのでは勿体無い。

先程のポーター少年は臨時のアルバイト(?)を得た事が嬉しいのか、ニコニコしながら私の脇に寄り添うように立っていた。背丈は高いがほっそりとした体格の、まだ幼さの残る頬っぺたの赤い可愛らしい顔をした少年だ。

私は先程からある事が気になっていて、必要以上にじっと彼の顔を見つめた。

「あなた、いくつ？」

「16歳」

「ねえ、・・・あなた私と会った事ない？」

彼はキョトンとした顔で首を横に振った。やっぱり違うのかあ～・・・

初めて亜丁を訪れた三年前の夏、私達の一行はある少年と知り合っていた。私達がキャンプ地として滞在していた洛絨牛場には、夏休みだというので遊びに来ている土地の少年たちも何人かいたが、その中でもとりわけ人懐っこく活発な、その少年と知り合った事が、二泊三日というほんの短い亜丁滞在の思い出の中に強烈な印象を残していた

* * * * *

その日の朝、亜丁の公園入り口に到着した私たちは、馬に跨り次から次へと現れる素晴らしい景色に、感嘆の叫び声をあげながら意気揚々と洛絨牛場を訪れた。成都を出てから4日間バスに揺られ続けて、やっとたどり着いたその旅での最終目的地、最後のシャングリラ「亜丁」を代表する景勝地ともいえる洛絨牛場は、青々とした牧草の中を、刷毛でなでたように黄色や薄桃色の高山植物が咲き乱れる美しい湿原だった。目の前に雄大に聳える聖なる山の万年雪と、氷河から溶け出してきた水が、三筋の滝になって岩肌を流れ落ち山裾に湿原を作っているのだ。湿原からあふれ出た水は、サラサラと流れる小川になって、ゆるやかに蛇行しながら湿原の中に点在する池を結び、鏡のような池の面には、白い雲を浮かべた真っ青な空と頭上に白い雪を戴いた雄雄しい

山の姿が逆さに写しこまれていた。そんな湿原の中を、土地の人達に放牧されている馬や牛が点々と散らばって、自由にのんびりと草をはんでいる風景はまるで描かれた一枚の絵のようだった。

成都から標高4000メートルの高さまで、一気にバスで駆け上ってきた為、数日前から続いていた高山病からくる鈍い頭痛も忘れ、景色に見惚れて走り回っていた私は、「昼食後にはまた馬に乗ってハイキングに行こうか」という案内人の烏里氏の言葉に飛び跳ねて喜んでいた。

しかし、高山の天気は変わりやすい。汗ばむほどに快晴だったお天気は、私達が昼食をとっているほんの数十分の間に、俄かに曇り始めたかと思うと、すっかり雨に変わってしまったのだ。楽しみにしていたホーストレックもこの雨で流れてしまい、馬達は恨めしげに見つめる私に背を向け、馬方に引かれて帰ってしまった。

そこがどんなに美しい場所であっても、山の中では雨に降られてしまうとどうしようもない。先程まで目の前にそびえていた雪山も、完全に霧の中に姿を消してしまい、山の写真撮影が目当ての男性陣は万に一つの望みを掛けて、山の方向にカメラを向け辛抱強くシャッターチャンスが訪れるのを待っていたが、写真に興味のない私を含めたやや年かさの女性陣4名は、合羽を着て所在無くキャンプ場の回りをウロウロしていた。

「もっと馬に乗りたかったのに、雨だなんて。つまらないなあ・・・」

湿原の中を歩き回り靴をドロドロにしながら、私は退屈な気持ちになりかけていた。

少年に出会ったのはそんな時だ。

亜丁自然保護区の中には、牛や馬の放牧をしている土地の人達もいて、時折石を積み上げたような牛番小屋が建てられているのが見かけられた。洛絨牛場にも2、3軒建てられていたそんな小屋のそばを私達が通りかかると、中から少年が顔を出し、笑顔で何か叫びながら、おいでおいでと手を振っている。

何故、呼ばれているのかもよく解らないまま、相手が子供だったことで警戒もせず、「面白そうだから行ってみようよ」と近寄っていくと、少年は、どうぞどうぞと小屋の中に招き入れてくれた。石と泥で塗り固められた

薄暗い小屋の中には二人の少年がいた。すすめられるまま土間の小屋の中に転がしてある丸太の上に腰を下ろし、私と母のつたない中国語でたどたどしく話を聞くと、13歳と14歳の兄弟だという二人は、近所の村に住む少年達で、夏休みだからここに来て遊んでいるのだということだった。初めのうちは、疑問に思っていたのだが、彼らが私達を小屋に招き入れた事に他意はなく、ただ外国人がきたからお茶に呼んでくれただけの様子だ。

垂丁が観光地として外国人に解放されたのは、ほんの数年前だと聞いていた。きっとそれまでは他所の土地から訪れる人も少なく、閉ざされた僻地の村で過ごしていたのであろう少年達にとって、突然自分達の土地に現れるようになった外国人が、珍しくて面白かったのだろうが、それにしあって、彼らの年頃の少年達が自分の母親や祖母と同年代の見知らぬ外国人女性を家に招いてもてなしてくれるなんて、日本の少年達では想像できない話だ。

兄だという少年は無口で大人しかったが、やんちゃそうな弟の方は、好奇心に目をきらきらさせながら、一人前のしぐさで小屋の真ん中に作られた囲炉裏に火をおこし、お茶を沸かしてくれたり、新聞に包まれて無造作に土間に転がしてあったチベット式のパンを食べないかと勧めてくれたり、果ては懐からタバコを取り出して勧めてくれたりと懸命にもてなそうとしてくれるのが微笑ましくて可愛い。

私達が笑いながら、彼が勧めてくれたタバコを断ると少年は自分用に一本抜き出し、慣れた手つきで囲炉裏の薪から火を付け、生意気そうに頬を傾けタバコを吸うしぐさも様になっていた。

「あらっ！あなたみたいな子供がタバコなんて吸っちゃいけないんじゃないの～！？」

すでに退職されているが以前は小学校の教師を勤めておられたという、この旅行で一緒にさせていただいた、Oさんが生真面目な声を上げたのが可笑しくて、私はクスクスと笑ってしまったが、日本語を解さない少年は何故、自分が笑われているのか解らずにキョトンとしていた。

そういえばこの日の朝、私達が乗ってきた馬の手綱を引いていた、どう見ても10歳くらいに見える馬方の少年もスパスパとタバコを吸いながら歩いていた。

こんな山奥の土地では少年がタバコを吸うことなど普通の事で、身体に悪いなどと咎める大人はいないの



少年たちに招待された洛絨牛場の牛小屋

だろうか。

まだ出会ってから十数分しかたっていなかったが、急速にこの少年に好意を感じてきていた私が、先程の雨にあたり濡れていたスカーフを首からはずして、囲炉裏にかざそうとすると、すかさず「俺が乾かしてあげるよ！」と少年は、くわえタバコのまま私からスカーフを取りあげ、注意深く広げながら火の上にかざして乾かしてくれたのだった。

これにはグッときた。見た目はまだまだ子供だが、チベット人の男の子ってかっこいいじゃないか～！！・・・そういえばタイやネパール、マレーシア、今まで訪れたどの国の子供達を思い返してみても、田舎の子供はよく働いていた。日本の多くの子供たちが親の庇護の元、遊んだり学校の宿題さえしていればいような年頃から、水汲みや掃除、若い兄弟の世話に薪運びなど、一家の労働力として当たり前働いてきた少年達は、見た目は子供でも日常生活レベルの能力に関しては、すでに大人の仲間入りしてるように感じられた。

それは、すっかり機械文明に侵食されてしまった現代では、その価値を認められなくなりつつあるのだが、自然の中で生きるためには、必ず必要とされるはずの「原始的な意味での生活能力」というものを感じさせ、常日頃、「昨今の去勢されて野生を失ったような、日本男性には魅力が感じられないわ！！」などと、己の魅力レベルについては一切省みることなく一方的に憂いていた私は、中国の山奥で、まだほんの13歳だという何処から見ても子供の彼に、思いがけず一人前の男の片鱗を感じハッとしたのだった。

数分後、少年が笑顔で渡してくれたスカーフはほんのりと暖かく、煙の香ばしい匂いがしみ込んでいた。

(次号に続く)

▶ 中国での春節を味わう

学校が冬休みのため約5か月振りに1月12日、日本に帰国した。冬休みは1月11日から2月29日までであったので、半分は日本で過ごし、残りを中国で過ごした。仕事に戻る前に出来れば北京、平遥、紹興などを訪ねてみたいと考えた。

帰国してから日本には約1ヶ月いたが、その間は毎日何かと忙しく、報告会やら友人と会うやら、また日本語の教材や中国人先生の同僚へのお土産を買いに出かけたりするなど、かなり多忙な日々であった。ゆっくり休むなどという余裕はなかった。しかし、多忙な中にも精神的にほっとする時間を多く持つことが出来、再び中国に戻って仕事が続けられそうだと気持ちの上でゆとりを得て、1ヶ月後日本を後にした。

中国には2月10日に戻ったが、大連に戻る前に少し旅行したいと思い、まず東京から直接北京へ行った。それから以前から訪ねてみたいと思っていた山西省の平遥(明清時代の街並みがあるまま残り、1997年ユネスコの世界遺産に登録)、浙江省の寧波、紹興そして最後に上海を訪れることにした。今年の春節は2月7日から12日まで、この間は大勢の人々が動くので移動が何かと大変だと聞いていたが、それほどでもなさそうであった。

北京では侶松園賓館に泊まった。このホテルは四合院と言われる伝統的な昔からの建物を模したホテルで、大きくはないが、北京の古い街並みの中にあり、胡同を見て回るのにはぴったりのロケーションである。最近何かと雑誌などで紹介されている「南鑼鼓巷」という通りの近くにある。北京ではここに5泊したが、何度もこの通りを散策した。

この時期春節のため毎晩のように花火が打ち上げられ、ホテルの近くではあちこちで爆竹の鳴る音もした。爆竹の音はかなりうるさいが、私にとっては珍しいので、歩いている時にその音がすると何度もその近くに行って、しばらく見ていたりすることが多かった。春節のもうひとつの特徴は、家々の門口に「春聯」というおめでたいことばが掲げられていることである。

対句となったことばが赤や金で彩られた華やかな縦長の紙に書かれてドアの左右に貼り付けられている。また、ドアの上の鴨居には「福」と書かれた四方形の紙が、

「福」の文字を逆にして貼り付けられている。どの家でも見られる光景である。以前4月ごろ北京を訪れたことがあるが、その時もまだこのような飾りがどの家でも貼られたままで、しかも破れそうになっていたが、これは自然に無くなるまで、張っておくものなのだろうか。そのような習慣でもあるのだろうか。

北京滞在3日目に天気がよかったので、「地壇公園春節文化廟会」という廟会にでかけた。これはこの時期あちこちで開かれている春節の祭り(日本の縁日とでもいうか)であるが、地壇公園で開かれているのが一番大きい。地下鉄「安定門駅」で下車すると、多くの人々が皆同じ方向に向かっているのが、すぐ分かる。人々の後について行けば地壇公園の入り口まではあっという間であった。公園前の横断歩道の上から見ると、人、人、人で、一体どこからこんなに人が湧き出てきたのかと思うほどの人込みである。公園入り口には何百という赤い提灯が飾られ、華やかな雰囲気を出している。入場券10元を払って中に入った。

中に入ると、とにかく何でもある。食べ物の屋台から正月の飾りや売店、おもちゃ屋、美術品(本物かなあ?)を売る店、子供向けのぬいぐるみ屋、射的屋、民族舞踊のステージ、カラオケ屋、蛇女の見せ物小屋、今年の干支のネズミのグッズを売る店等々何でもある。普段見られないものがたくさん売られている。中国風風車(かざぐるま)とでも言うような、カラフルな色に塗られたものが何十となく屋台の上に取り付けられて売られている。風に吹かれてカラカラ音を立てていた。

小さな台の上で草を使ってこおろぎ、バッタ、蝶などを作っている人もいる。多分農村から来た人かも知れない。また、伝統的な年画を売る屋台もある。この人も農村から来たのだろう。あちこちで多くの人が正月用の飾りといったものを買い求め、それらを大事そうにして持ち帰るのを見た。

一番興味があったのは食べ物の屋台である。北京名物もたくさん売られていたが、何と言っても目を引いたのはモンゴル風のシシカバブだろう。食べ物の屋台の中でかなりの店がこのシシカバブを売っていた。どの店も1本10元。かなり高いかと思って何軒か回っていると、もっと安い店があった。試しに買って見たが、まあまあ味の味であった。焼きイカ、焼きトリ、茹でたとうもろこ

し、北京名物の練り菓子、米線(米で作った麺)、さんざしの糖葫芦(飴菓子)などが目に付いた。驚いたのは「アラビアのシシカバブ」という名前の出ている屋台であった。中東出身の人らしい男の人が何人も白い独特の服装をして店先でシシカバブを焼き、販売していた。珍しいせいか、かなり多くの人々が店先に群がっていた。

園内を回っていると、結構時間を忘れて楽しむことが出来た。しかし、かなり疲れてしまった。数時間歩き回

ると、かなり広い園内はどこがどうだか方向が分からなくなってしまう。かなり疲れたので帰りたいたと思ったが、出口が分からず、うろうろして結局出るまで20、30分もかかってしまった。しかし、とにかくこの日は北京の人々の春節の楽しみを共有出来たような気がして、楽しくホテルに戻った。一日中ほのぼのとした気持ちでいることが出来た。

アフリカとの出会い (24) アフリカの政治家

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

3月になり、前国連事務総長コフィー・アナンを仲介役としてケニア大統領選挙後の混乱は、政治的な決着を国内外に知らせることとなった。結局、キバキ氏が大統領として続投し、敗北したライラ氏が、prime ministerとなることで決まった。両氏は、二人揃ってゴルフをしているところを報道させるなど、関係回復をアピールするのに忙しい。

全くもって、透明性に欠ける「アフリカの政治」を象徴したような今回の選挙後の混乱だったと思う。選挙の開票作業の正確性は、第三者機関であるはずの選挙管理委員会の信憑性やEUの選挙監視団などの視察の拒否、マスコミを開票場に入れられないなど、どこまで本当かどうかはわからないがいろいろな噂を呼んでしまっている。アフリカの政治家たちの汚職、職権乱用、その不透明性。思わずアフリカがもっと発展しない理由の根源がそこにあるのではないかと感じてしまう。

アフリカの政治家ってどんな人たちなんだろうと、ケニアに住んでいた時から興味があって演説会、選挙活動、ハランベと呼ばれる寄付金を集めるパーティー 一等機会があるごとに参加してみた。私がいた4年前は、ちょうど大統領選挙があり、しかも野党のキバキ氏が与党のモイ氏を破ったこともあり、政治的に大いに盛り上がっていた。しかし人々の期待とはよそに、選挙票をお金やもので売る人はたくさんいて驚いたことを覚えている。

例えば西アフリカのシオラレオネという国では、選挙の時、字が書けないよう両手を斧で切るとい

う残虐なことがあったりしたが、少なくともケニアでは民主的に選挙が行われたようにみえていた。しかしキバキ氏が就任後、彼が任命した大臣たちを乗せた飛行機が墜落したり(数名の大臣が死亡、意識不明)、その後も暗殺事件がおきたりしていた。陰では旧体制を支持する人たち(旧大統領陣営)の仕業ではないかと言われている。

モイ大統領は、自分を支持しない政治家、人々を片っ端から投獄していた。「言論の自由」は、自分にはあっても人には与えてこなかった。日本のように「～に反対」と街頭でデモ行動をするというのにはあり得ないのだ。そう考えるとキバキ大統領になってからは、人々が自分たちの意見を発言しているような気がする。

ケニアの政治家は、間違いなく演説が上手だ。すぐに引き込まれていって、聞き入ってしまう。冗談もところどころにあり、言葉の魔術師かのごとく人々を魅了させていく。そしてやっぱり太っている人が多い。肥満は富の象徴のようである。そして笑顔が素敵だ。カリスマ性があるのだろう。

だから人々は尊敬のまなざしで選挙区の代表を送り出す。

本当に国の発展を何よりも考えている政治家をと思うが、残念ながら少ないのが現状のようである。

国際的には、落ち着いたように見えるケニア。住む所を追われた国内難民の帰還はまだ進んでおらず、人々の心に残した傷跡や経済的な損失からはこれからもすぐには立ち直れそうにはなさそうだ。

【活動報告】

[山西省家庭料理で交流しよう!]

於：三輪センター 2008年3月15日(土)

講師：何媛媛さん 参加：10名

‘わんりい’に「媛媛来信」や「媛媛講故事」でお馴染みの媛媛女士に、媛媛さんが日常的に作っていらっしゃる山西省料理を教えて頂きながら一緒に作ってみました。

作ったのはなんと7種類の欲張りメニュー。「花巻」「葱花烙餅」「過油肉」「家常豆腐」「紅焼肉」「糖酢白菜」「銀耳蓮子羹」そしておまけは「わんりい特製杏仁豆腐」。出来上がった料理はテーブルに置ききれないほど。それぞれのコツを踏まえた料理はとても美味しく舌鼓を打ちながら頂きました。

珍しいのは「銀耳蓮子羹」、女性の肌をきれいにする薬膳的効果のあるデザートとか。銀耳とは白キクラゲのこと、白キクラゲに山西旅行帰りのメンバーのお土産の大棗、蓮の実を加えておかゆを作るようにとろとろと、白キクラゲがもったりするまで煮込んで氷砂糖で味付けをします。

目からうろこは、「花巻」と「紅焼肉」。花巻は中国北方地方でよく食べられる小麦粉の主食料理ですが、特に花巻は、中国旅行をされた皆さんはご存知のひらひらのリボンを幾重にも巻いたような蒸饅頭風の主食。簡単そうに見えるのですがどうしたらこのように成形できるかが謎でした。

ベースは包子と同じく、小麦粉をイースト菌で発酵させたものです。何女士の小さなしなやかな手が手際よく動くと、魔法のように開き始めたバラの花のような花巻が成形され、思わずみなの中から‘オウ’という嘆息が漏れました。

バラの花のようにとは行かないまでも目で見ればけっして難しくはない成形の仕組みながら文章での表現は‘難’です。「発酵した生地を2cmほどの厚さのぼして、油を塗り、ロール状にくるくる巻いて、こぶし大に切り分け、一つ一つを横に伸ばして捻って花形に丸めて成形する」で、お分かりでしょうか？

もう一つ、「紅焼肉」。煮込みを始める下準備は、油に砂糖を入れて肉に焼きつけ、色付けと肉のうまみの封じ込めをすることです。他にもいろいろ中華料理のコツを教えていただき、味と量ばかりではない収穫の多い交流会でした。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

huí niángjia 回娘家

fēng chuī zhè yángliǔ me shuō lāla lāla lāla
凤吹这杨柳么唰啦啦啦啦啦啦
xiǎo héli shuǐliú zhè huā lā lā lā lā la
小河里水流这哗啦啦啦啦啦啦
shuǐjiā de xīfù tā zǒu ya zǒu de máng ya
谁家的媳妇她走呀走的忙呀
yuánlái tā yào huí niángjia
原来她要回娘家

shēn chuān dàhóng ǎo tóu dài yī zhī huā
1 身穿大红袄 头戴一支花
yǎnzhǐ hé xiāngfěn tā de liǎn shàng cā
胭脂和香粉她的脸上擦
zuǒshǒu yī zhī jī yòushǒu yī zhī yā
左手一只鸡 右手一只鸭
shēnshàng hái bèi zhe yī gè pàng wá wa ya
身上还背着一个胖娃娃呀
yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂

yī piàn wū yún lái yī zhèn fēng ér guā
2 一片乌云来 一阵风儿刮
yǎn kàn zhe shān zhōng jiù yào bǎ yǔ xià
眼看着山中就要把雨下
duǒ yòu méi chù duǒ cáng yòu méi chù cáng
躲又没处躲 藏又没处藏
dòu dà de yǔ diǎn wǎng wǒ shēnshàng dǎ ya
豆大的雨点往我身上打呀
yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂

lín shī le dàhóng ǎo
3 淋湿了大红袄
chuī luò le yī zhī huā
吹落了一支花
yǎnzhǐ hé xiāngfěn biàn chéng hóng ní bā
胭脂和香粉变成红泥巴
fēi le yī zhī jī pǎo le yī zhī yā
飞了一只鸡 跑了一只鸭
xià huài le bèi hòu xiǎo wá wa ya
吓坏了背后小娃娃呀
yī ya yī de ér wéi
依呀依得儿喂
āi ya wǒ zěnme qù jiàn wǒ de mā
哎呀！我怎么去见我的妈

【ご予約ください】

楽しい催しいっぱい！あさおサークル祭

於：麻生市民館 全無料

- 5月24日(土)視聴覚室 10:30～12:30
スライド上映会「現地インドネシア人たちの撮影によるインドネシアこの10年」
- 5月24日(土)大会議室 14:30～16:30
TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル演奏会
- 5月25日(日)視聴覚室 13:30～15:00
スライド上映会「写真でたどるチベット旅行」
詳細は‘わんりい’5月号で紹介いたします。

日月山荘のミンミン「東京の休日」

「わりい」メンバー有志が呼び掛けて何回か四姑娘山自然保護区を訪ねた折、毎回、旅の参加者たちが四姑娘山山麓の宿「日月山荘」に宿泊しお世話になりました。

その宿の長男、ミンミン君(本名 ^{ミンピンミン} 明平銘)が昨年10月より岐阜県朝日大学に留学中との情報で、有志数名が、大学の春休みを利用した「ミンミン東京の休日」を企画しました。「四姑娘山の旅」参加の皆さんに呼び掛けたところ、多くの方々がご賛同下さり、ミンミン君を東京に呼ぶかなりの支援金も集まって日程は3月21日から25日に決まりました。

初日は「はとバス」東京観光巡り。2日目は「ミンミン歓迎会」で、写真はその一コマ。「能ヶ谷西緑地・樹の会」のご協力もあって、約30名を越える人が町田市鶴川にある通称「能ヶ谷西緑地」に集まり、遊牧民風味のヤキトリ、刀削麺、餅つきなどで楽しく過ごしました。主賓のミンミンはもりもり食べるというタイプではなく、上品に食べるタイプでした。そして夜はベイブリッジ夜景ドライブ。

3日目は、浅草、お台場観光。水上バス、ゆりかもめ、と普段東京人も乗らない乗り物を体験。某ホテル売り物の「人力車で神前結婚式」に遭遇。興味を持った様子でした。

4日目は、金時山登山で富士山と対面する予定でしたが、あいにくの雨～曇天で、富士山は見えませんでした。それでも日本の山を体験して満足の様子でした。金時山下山後は、伊豆伊東の温泉旅館へ直行。日本風のおしゃれな旅館、初めて

見る大きな海ともども感銘を受けたようです。

5日目の最終日は江の島～鎌倉。雲間に真っ白い富士山がちらりと顔を出し、念願の富士にもやっと対面ができませんでした。折から桜の花も咲き始め、短い日程ながら盛り沢山の「東京の休日」は終了、新横浜から新幹線で名古屋に帰りました。

関係の皆様、ありがとうございました。(佐々木健之)



餅つきに挑戦のミンミン君

《'わりい' 掲示板》

崔宗宝と唄う会 - First concert

ソロ/指揮：崔宗宝 ピアノ：渡辺貴志子/市川直子
特別ゲスト：任 雁(ソプラノ)

於：海老名市文化会館小ホール

2008年4月25日(金)

18:30～(開場18:00)

2,000円

主催：崔宗宝と唄う会 <http://lbn.cc/sai-soho/>
問合せ：046-235-2716 崔宗宝音楽事務所

『茶館銀芽』11周年記念

～ 茶仙との出会い ～

2008年5月25日(日) 11:00～16:00

於：菜香新館5階

横浜市中区山下町192 ☎045-664-3155

参加費：8,000円 60名

*菜香新館特別メニューの昼食と二胡の賈鵬芳さんと古箏の小青さんのコンサートタイム(1時間)

詳細問合せ：ラサ企画 TEL/FAX: 03-5748-3040

lasanon@db3.so-net.ne.jp

ひびけ国を越えて 女声の歌ごえ

昌原市(韓国)女声合唱団と

麻生童謡を歌う会のコラボレーション

♪新アリアン ♪さくらさくら ♪春を待つ2つのうた
♪韓国に伝わる歌(宮廷女官チャングムの誓いより)等々

於：新百合21大ホール 小田急新百合ヶ丘駅北口徒歩1分
2008年4月25日(金)

18:00～(開場17:30)

1,000円

主 催：麻生童謡を歌う会
ユネスコ国際民間文化芸術交流協会
問合せ：044-988-5032 菅原

インドネシア・ジャパン国際文化交流写真展

現地インドネシア人たちの撮影によるインドネシアこの10年

2008年4月29日(火)～5月11日(日)

(財)日本カメラ財団 JCIIIフォトサロン

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地JCIIIビル

主催：Indonesia Japan Photo Exhibition

問合せ：090-9006-9899 森隆伸

上海美術館コレクション 1979-2007 (入場無料)

於：(財)日中友好会館・大ホール

東京都文京区後楽1-5-3

'08年5月10日(土)～6月8日(日)

10:00～17:00 (月曜休館)

金曜日のみ19:00まで開館

●ギャラリートーク：

5月10日(土) 15:00～(約40分)

*上海美術館館員による作品解説

COLLECTION OF
SHANGHAI
ART
MUSEUM
1979-2007

主催：

(財)日中友好会館上
海美術



周 鉄海「Innocence」 2005年
シルクスクリーン・88.5×64cm

中国最大の商業都市、上海の繁栄街・南京路に位置している上海美術館。幅広いジャンルの作品を所蔵、展覧しています。同時に最も注目を集める現代アートの展覧会の一つである「上海ビエンナーレ」の会場でもあり、自国の伝統と国際的な感覚を持ち合わせる現代中国アートの発信地としての役割を担っています。本展ではその上海美術館の収蔵品の中から、選りすぐりの現代アート67点(油絵、水彩画、版画)展示します

★新しい中国現代アートの原点がここに

急激な社会的変動と経済成長を遂げている近年の中国。これらの変化は芸術の発展やあり方にも大きな影響を及ぼしました。変化の只中に制作された作品には、テーマや表現方法、そして何よりも画家の精神に新しい芸術を作り出そうとする息吹が感じられます。世界中から、今熱い注目を集める中国現代アートの原点と呼べる作品の数々が集結しました。

張曉剛(ジャン・シャオガン)や方力鈞(ファン・リジュン)、劉小東(リュウ・シャオドン)などオークションでも話題となっている画家の初期作品や、1979年に結成し“中国現代美術の始まり”とされる前衛美術グループ・星星画会のメンバーであった嚴力(イエン・リー)や、90年以降発展してきた抽象芸術の代表的な画家の一人である申凡(シェン・ファン)など、中国現代アートを語る上で欠かせない画家達の作品をご紹介します。

和光大学オープンカレッジぱいでいあ

【バンバン・ルディアント先生のインドネシア講座】

インドネシアの行くへ～文化・歴史・政治・経済を学ぶ～

春季9講座 5/14 21 28 6/4 11 18 25 7/2 9

水曜日 10:40～12:10

於：ぱいでいあ教室(小田急線鶴川駅前) 募集：50名

受講費：9回分として13,500円(入学金なし/一括支払い)

申込み締切り：4月14日(月)

申込用紙請求は、電話またはファックスで下記へ

TEL：044-988-1433 FAX：044-988-1594

じゃがいもはジャカルタからやって来たという話から、民謡ベガワン・ソロの歌、文化・歴史・言語、美しいバリ島の魅力を、映像を交え、分かりやすく面白く紹介します。海外に飛び出したインドネシア人だからこそ、客観的に母国を見つめ直すことができ、日本人々へ刺激を与える立場にもなれます。インドネシア、そして現在の日本を在日外国人の視点で語ります。

【4月の定例会&おたより発送予定日】

定例会：4月14日 13:30～ 田井宅

おたより発送日：4月30日(水)(予定) 田井宅

ご一緒に四姑娘山・花の山旅はいかが？

*7月3日～7月12日(9泊10日)

*費用：25万円位を予定しています。

*世界自然遺産に指定された四川省四姑娘山の花を愛でる仲間・12名ほどを募集、ツアーリーダーのいない個人旅行形式で実施します。

*詳細問合せ ☎：042-722-7752(河本)

ご一緒に内モンゴル・草原の旅はいかが？

*6月1日～6月8日(7泊8日)

*費用：20万円位を予定しています。

*募集：10名～12名

*馬頭琴演奏のチ・ブルグッドさんの山荘に泊まり、2004年に‘わんりい’が植樹したモンゴル松の生育状況を見たり、現地のモンゴルの家族と交流したり、草原で乗馬を楽しんだり、大草原を走る鉄道に乗車等を予定しています。チ・ブルグッドさんも同行。

*詳細問合せ：☎042-734-5100(田井)

